令和5年度　教育課程特例校実施状況（自己評価・学校関係者評価）

聖隷クリストファー小学校は、日々変化を遂げる国際社会の中で活躍するために必要な高い英語力と能力・知識を備えた人材を育成するため、国語科及び社会科の教科以外の授業を外国人教員による英語で行う英語イマージョン教育を行うことと、図画工作科、外国語活動の時間、総合的な学習の時間の一部を英語科の時間に充てる教育課程特例校としての認定を受けています。教育課程特例校は、特別の教育課程の実施状況に対する自己評価と学校関係者による評価を毎年公表することになっています。

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語イマージョン環境の充実	①　日本人教員と外国人教員の二人による学級指導体制とする。 ②　朝の礼拝時に英語に触れる。 ③　掲示物等に効果的に英語を用いる。 ④　英語図書を揃える。 ⑤　外国人教員は原則的に常に英語を用いる。 ⑥　教員と児童・保護者間の連絡ツールで英語を用いる。 ⑦　ICT を効果的に用いる。	B	①　日本人教員と外国人教員が、協力して朝の会・帰りの会を行うなど、英語イマージョン環境が確保できている。全学年で子どもが英語での会の実施に取り組んでいる。 ②　毎朝の礼拝時には、司会児童が英語で全校にアナウンスしている。全校児童が英語に触れる機会を増やしてきた。また、賛美歌を英語で歌う機会を多くもてた。 ③　児童が英語で作成した掲示物が校内に掲示できている。高学年児童においては、英語で掲示物を表記する機会が増え、それを目にする低学年が英語に触れ、英語を活用していこうとする意欲につながっている。 ④　英語の蔵書は段階的に揃える予定であり、令和5年度には、蔵書を増やした。今後、計画的に探究学習の資料になるような書籍を増やしていく。 ⑤　外国人教員は概ねオールイングリッシュで授業ができた。 ⑥　外国人教員が英語で学習の事前準備や学習報告をするなど、有効に活用できていた。今後も継続したい。 ⑦　ICT を活用した学習では、英語を使用したアプリケーションだけでなく、コミュニケーションツールとして活用する学級が増えてきている。（特に高学年）	B	掲示物が英語で表記されているだけでなく、その内容が詳しく表されている。児童の外国人教員の英語に対する聞き方や話し方が自然で、英語での学習環境が定着しつつある。この取り組みを続けてほしい。

※評価点は、A（十分に効果があった）・B（成果があった）・C（少し成果があった）・D（成果がなかった）

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語による探究的な学び	① 教科の枠を超えた学びを英語で行う。 ② 探究単元学習（UOI）と教科学習の中で、英語での授業を展開する。 ③ 児童の学びに対し形成的評価を行い、個々の英語力に合わせた指導を展開する。 ④ IB PYP プログラムの導入に伴い、定期的に英語学習と探究学習の研修を行う。	B	① IB PYP（国際バカロレア機構、プライマリー イヤーズ プログラム）の考え方に基づいた UOI（探究単元学習）を実施した。令和5年度は、6つの単元（UOI）を年間計画に位置付け、それぞれの学年で工夫して取り組んだ。今後、学校全体としてめざす児童像をもとにした教育を充実させていきたい。 ② 探究単元学習（UOI）と英語を用いる教科の中で、児童が体験的に英語を身に付けることができ、高学年児童の中では、ポスターやノートに英語表記の内容を記述するものが多くいた。 ③ 形成的評価を実施し、前期・後期と2回に分けて評価シート（Progress Report）を作成し、三者面談を実施した。このことより、児童の実態に応じた英語力の評価とフィードバックが可能になってきた。また、個別最適な学びと協働的な学びに関する研修を充実させることが本校教員にとって必要であるという課題が生まれてきた。 ④ IB PYP の導入に伴い、定期的に英語学習と探究学習の研修を行うことにより、教員の指導力向上につながってきた。	B	探究単元学習、教科等について、英語で学ぶ授業が定着しつつある。探究的な学びや授業で身に付けた英語が、学校生活や日常生活の中で使われていき、地域社会へ還元して行くことへの期待がもてる。

※評価点は、A（十分に効果があった）・B（成果があった）・C（少し成果があった）・D（成果がなかった）